

エフェソのアルテミス大騒動

ローマ帝国シリア州の首都エフェソは、当時東地中海全域で信じられていたアルテミス女神礼拝の一大中心地でもあった。アルテミスはギリシャではオリンポスの12神の一人で、狩猟、出生、女性の純潔を守る女神であったがエフェソでは、小アジアに古くから伝わる豊艶な出産の母神、フェニキヤのアシタロテと結びついて、多産、豊饒の神、動植物の保護神、旅行の安全の守り神として広く崇められていた。

エフェソの最大の誇りはアルテミス大神殿であった。その神殿は世界の七不思議の一つといわれるほどの壮大華麗な建造物で、その長さは約130メートル、幅は66メートル、高さは18メートル、127本の大理石円柱を持ち、その規模はアテネのパルテノン神殿の四倍ちかい巨大な神殿であったという。

太陽暦の3月~4月はエフェソではアルテミシオンの月と呼ばれ、神殿の大祭が開かれ、全アジアから多くの巡礼者が訪れ、多大の富を町と神殿にもたらした。その巡礼者たちを相手に神殿模型を作って、それを売って商売をしていた銀細工人のひとりがデメトリオであった。

使徒パウロの三年にわたる熱烈な伝道による福音の浸透は、アルテミス神殿に関わる商売をしている人々に少なからぬ打撃を与えた。商売上多大の不利益を被ったデメトリオは同業者を煽動して、大女神アルテミスとその神殿を侮辱するものとしてパウロに対する激しい反対運動を展開していった。

その運動は大騒動にまで発展し、町中が大混乱に陥り、人々はパウロを見つけることができなかつたので、パウロの連れであるガイオとアリストルコを捕らえて、いっせいに劇場になだれ込んだ。事態は収集できないほど緊迫し、パウロやその同業者の身の安全は危険にさらされた。もし市の書記役の賢明な判断と努力によって騒動が鎮静されなかつたとすれば、あるいは彼らは殉教の死を遂げていたかもしれない。

後に彼はコリントの信徒たちに宛てた手紙でこう書いている。「アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼みとするようになりました」(第2コリント1:8、9)。また使徒言行録20:31で彼は、そのような苦難の中で、「わたしが3年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい」と感慨を込めてエフェソの長老たちに語っている。

パウロの宣教には絶えず苦難が伴ったが、そのような苦難を通して自分は神の臨在の力に触れ、神のご主権にゆだねることの意味をいっそう深く学んだ、というこの彼の言葉をわたしたちもまた深く吟味したいと思う。

或る注解者は次のように言っている。「苦難の結果として人に与えられる最大の祝福は、苦難を通して神に近づき、深い慰めを経験することができるという事実にある。神は、簡単には人を死に渡されない。いやそれだけではない。神は死人をもよみがえらせてくださるお方である。過去に救われた経験を持っている者は、前途に対してもゆるぐことのない確信をいただく。こうしてパウロは、いっさいの望みを神にかけるのである」。

今、私たちに必要なものは何であろうか。神の御前における静かな確信であり祈りである。この一週間も、そのような確信と祈りをもって、それぞれの場所与えられた一日一日を信仰をもって歩んでいきたいと思う。